令和７年度　倉敷市立短期大学　専攻科（服飾美術専攻）
入学試験（二次募集）
小論文問題

受験番号

次の文章をよく読んで、問いに答えなさい。

住民参加型デザインはあり得るか

①公共施設のデザインにどこまで住民の意見を取り入れるか。これはなかなか難しい問題だ。ひとつの考え方として、住民には意見を聞かず、専門家だけでデザインを検討するという方法がある。空間のデザインを学び、何年も実務に携わってきた専門家は、当然その道のプロである。世界中で試行錯誤されるデザインの事例を知っているし、歴史的なデザインの潮流も踏まえている。四六時中、デザインのことを考えているのだから、任せれば歴史に残る名建築や美しい公園を設計してくれる可能性も高い。

もうひとつの考え方として、いくら専門家とはいえ公共施設を設計するのだから、住民の意見を聞きながらデザインを検討すべきだろうという意見もある。完成したら地域住民が使うものである。地域住民の意見を聞かずに設計するというのはおかしい、というわけだ。これも一理ある。住宅なら施主の意見を聞きながら設計を進める。そこから名建築だって生まれている。住民の意見を聞いたからといってデザインの質が下がるということはあるまい。そう考えるのも当然だろう。

最初の意見を擁護する際によく引き合いに出されるのがエッフェル塔である。エッフェル塔は1889年に完成したが、その建設途中から斬新なデザインに対する批判が相次いだ。鉄骨むき出しの奇抜なデザインが当時の石造りの町並みにそぐわない、醜悪なデザインであるという意見が多かったのである。住民の意見を聞きながら設計していたら、きっと今のようなデザインにはならなかっただろう。しかし、設計者のエッフェル氏は最後まで自分のデザインを主張し続けた。その結果、エッフェル塔はパリの名所となり、世界一の観光地となった。ほら、だからデザイナーは信念を持って自分が信じた設計を進めるべきなんだよ、という話になる。

この話に対して、もうひとつの意見からは「エッフェル塔はたまたま後から評価が高まっただけじゃないの？」という反論がある。住民の意見を聞かなかったから素晴らしいデザインが実現したというが、その他多くの「専門家デザイン」はすぐに淘汰（とうた）されて消え去っているのではないか、という意見だ。まさか町中にエッフェル塔が建つわけじゃあるまいし、記念碑的な塔ではない公共建築は住民の意見を聞きながら設計すべきでしょう、という話になる。

デザイナー同士で話をしていると、こんな話を夜通し続けることになる。デザイナーは、まさに四六時中デザインのことを考えている生き物なのである。

どう話し合うか

②コミュニティデザインに携わる立場からは、後者の意見をさらに掘り下げてみたくなる。公共施設のデザインは地域住民の意見を聞きながら進めるべきである、という意見だ。

まず気になるのが「地域住民」とは誰なのか、ということだ。公共施設の敷地周辺に住む人なのか。それとも働きに来ている人も含むのか。学びに来ている人も含むのか。そして、「敷地周辺」とはどのあたりまでを含むのか。小学校区か、市町村か、近隣市町村を含むのか、都道府県下全域か。

令和７年度　倉敷市立短期大学　専攻科（服飾美術専攻）
入学試験（二次募集）
小論文問題

受験番号

次に、「敷地周辺」の「地域住民」の意見をどうやって聞き取るのか。広報や説明会は一方的に情報を発信するだけなので意見を聞き取ることにはならない。だとすればアンケートか。あるいはワークショップか。ワークショップは丁寧な進め方だろう。では、ワークショップの対象者はどう絞るのか。すべての住民が参加したらワークショップは成立しないし、参加者が少なければ得られる情報は偏ったものになりかねない。

さらに、諸々の都合でワークショップ会場まで来られなかった人たちの意見はどうなるのか。同様に、まだ生まれていない将来世代の意見は聞き入れなくてもいいのか。公共建築は長くその場所に存在することになる。たまたまそのときに生きた人たちの意見だけを聞きながら設計を進めるということでいいのか。

また、ワークショップ会場に集まった「地域住民」からどんな意見を聞き出すべきなのか。和風の建物が好きな人もいるだろうし、洋風の建物にすべきだという人もいるだろう。赤がいい、いや青がいい、という話になるだろう。そうなった場合、すべての意見を聞き入れるとどんなデザインになるのか。和風のようにも洋風のようにも見え、赤にも青にも見える公共施設が誕生することになるのだろうか。

次々と疑問が生まれる。「やっぱり住民の意見を聞きながらデザインするなんて無理かな」という気持ちになる。それでもやはり、その地域で生活する方々と話し合いながら設計を進めたい。せっかくの機会なのである。より多くの人に関係する案件なのである。この機会に集まって、知り合って、話し合って、知らないうちに仲間になって、何か一緒にやりたくなって、完成した公共施設で活動するための準備をし始める。そんなコミュニティが生まれるチャンスなのである。

出典：山崎　亮著『コミュニティデザインの時代』中央公論新社 pp.84-87, 2012

問１．　下線部①の「公共施設のデザインにどこまで住民の意見を取り入れるか。」において、どのような考え方があると述べられているか、100 字程度でまとめなさい。

問２．　下線部②の「コミュニティデザインに携わる立場からは、後者の意見をさらに掘り下げてみたくなる。」について、その掘り下げた具体的な内容を 120 字程度でまとめなさい。

問３．　あなたが考えるデザイナーとはどのような仕事か、400 字以内で述べなさい。